

# きれいなきれいな町

小川未明

青空文庫



あるところに、かわいいそうな子どもがありました。かね子さんといって、うまれたときからよく目が見えなかつたので、お母さんは、たいそうふびんに思っおもていらっしやいました。

あちらにいい目のおいしやさまがあるといえ、そこへつれていき、またどこそこにい目のおいしやさまがあると聞きけば、そこへつれていきました。

けれど、どのおいしやさまも、はつきりなおるとうけあつた人はなかつたのです。

「お母さん、わたしは目が見えなくても次郎さんがあそびにきてくださるから、ちつともかなしくはありません。」と、かね子さんはいいました。

「ほんとうに次郎さんは、やさしいお子さんですね。あんなにしんせつなお子さんはありませんよ。」と、お母さんもおよろこびになりました。

毎日、次郎さんはあそびにきてくれました。

「かね子さん、ぼく、おもしろいご本をもつてきたのだよ。いま読んであげるからきいてごらん。」

そういつて次郎さんは、浦島太郎のお話を読んできかせました。

「かね子さん、おもしろい？」

「おもしろいわ、太郎は助けたかめをにがしてやったのでしよう。」

「そうすると、かめがおれいにやってきたのだよ。どうかわたしの背中につけてください、龍宮におつれ申しますといったのさ。」といって、次郎さんはご本のきれいな絵をながめていました。

「やあ、きれいだな。青や赤やでぬったご門があつて、龍宮つてこんなきれいなところかなあ。」と、次郎さんは感心していました。

けれど、かね子さんには、その絵がわかりませんでした。

「次郎さん、どんなきれいな絵がかいてあるの？」と、なみだぐんでききました。

次郎さんは、かねさんが目の見えないのに気がつくど、

「ああ、悪かった。うらやましながらせるようなことをいわなければよかった。」と、後悔をしました。

そして、どうしたらかねさんの目がよくなるだろうと思いました。

「ねえ、かね子さん、泣くのはおよし。ぼく悪かった、かんにんしておくれ。」

「いいえ、次郎さんが悪いのではない。わたしの目はなおらないって、お母さんがおつし

やったので、かなしいのよ。」

「ぼく、どうかして見えるようにしてあげるからね。」と、次郎さんがいいました。

浦島太郎は、かめを助けたために龍宮へ行って、おとひめさまにであつたのだから、ぼくもこれから殺生をしないことにしようと、次郎さんは思いました。

「あつちからきたのは勇ちゃんらしいな。」

次郎さんは、往來に立ちどまって見ていました。やはり勇ちゃんでした。もちぼうを持ち、片手にとんぼのかごをぶらさげていました。

「勇ちゃん、とんぼが取れた？」と、次郎さんはききました。

「むぎわらとんぼが二匹と、やんまを取ったよ。」と、勇ちゃんは、とくいになつて答えました。

「やんまを取ったの？」

次郎さんは、うらやましそうにかごの中をのぞくと、大きなやんまがいました。

「どこでやんまを取ったの？」

「あつちの梅の木にとまっていたのだよ。」

黒い目のくるくるした、黄色なすじのある、いいやんまでした。

次郎さんはふところから、浦島太郎のご本をだして、

「勇ちゃんは、こんな絵本を見たことがある？」と、ききました。

勇ちゃんは、きれいな本だと思いました。

「見たことがない。おもしろいかい？」

「これはおもしろいよ。見せてあげるから、勇ちゃん、とんぼをみんなにがしておやりよ

。」と、次郎さんがいいました。勇ちゃんはびつくりして、

「いやだ。ぼく、せっかく取ったのだから。」と、目をみはりました。

次郎さんは、どうしたらとんぼを助けることができるかと考えました。

「君は、浦島太郎が龍宮へいった話を知っている？」

「知っているよ。だけど、あれはおとぎばなしだろう。」

「うそのことは、本に書いてあるわけではないよ。これは浦島太郎の絵本だよ。これと、

とんぼとつかえつこをしようよ。」と、次郎さんがたのみました。

「この大きなやんまは、おしいな。」勇ちゃんはやんまをながめました。

「勇ちゃん、いいだろう？」

「じゃ、とりかえっこしてあげよう。」

二人は、絵本ととんぼととりかえっこをしました。次郎さんはとんぼを持って、はらっぱの方へ走っていききました。

「さあ、みんなにげていけ。もうけっして子どもたちにつかまるなよ。」と、浦島太郎がかめをにがしたときのように、いいました。

次郎さんは、かね子さんに、じゆず玉を取ってあげようと思つて、原っぱへ三りん車にのつてやつてくると、やはり三りん車にのつた子が、一人であそんでいました。

「君は、どこの子かい？」と、次郎さんがききました。

「ぼくの町はこつちだよ。そうして、ぼくの名は、とんぼごぞうというのだよ。」と、その子はいいました。

「おもしろい名だね。」

「君とぼくと、三りん車の競争をしようよ。」と、とんぼごぞうがいました。

「ぼくは、じゆず玉を取ろうと思つて、ここへきたのだよ。」と、次郎さんは答えました。すると、とんぼごぞうは、

「じゆず玉は女の子の持つものだけ。」といつて、わらいました。

「そうさ。ぼくは、かね子さんという目のわるい、かわいそうな女の子のために取りにきたのだよ。」と、次郎さんがいうと

「目がわるいの？ そんなら、いいお薬があるよ。」と、とんぼごぞうがいました。

「ある？ どこに？」

「ぼくの町にいつしよにおいでよ。」と、とんぼごぞうが先になつて走りました。

次郎さんはその町がどこかと思つて、つづいて走りました。赤い夕やけの空を見ながら、二人がいくと、きれいなきれいな町にきました。たくさん、ちようちんがついていて、にぎやかでした。

「おまつりがあるの？」と、次郎さんがききました。

「おはぐろとんぼのお姉さんが、およめにいくのだよ。」と、とんぼごぞうがいました。

「ここは、とんぼの町なの？」と、次郎さんはおどろきました。

「とんぼの町だよ。めつたに人のこられぬところさ。君はいい子だから、ぼくがつれてきたのだよ。」と、とんぼごぞうがいました。

「どこに目薬があるの？」

「あすこ……。」と、とんぼごぞうが、ゆびさしました。

いってみると、むらさき色のびんがならんでいました。

「よくきくかい？」と、次郎じろうさんがきくと

「とんぼの目めをごらんよ。みんないい目めをしているだろう。」と、とんぼごぞうが答こたえま  
した。

「どうぞこの町まちを忘わすれませぬように。」と、次郎じろうさんは、いくたびも神かみさまにねがいまし  
た。

そうして、かえりには、しんせつなどんぼごぞうに、原はらっぱまでおくってもらいました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「きれいなきれいな町《まち》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# きれいなきれいな町

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>